

大阪+知的障害+地域+おもろい=創造

知の知の知の知

社会福祉法人大阪手をつなぐ育成会 社会政策研究所情報誌通算 3311 号 2016.10.21 発行

【主張】黒石市の授賞騒動 被写体の思い見つめたい 読売新聞 2016年10月20日



授与撤回から一転し市長賞を贈られることが発表された、踊りを披露する葛西りまさんの写真＝8月15日（遺族提供、画像の一部を加工しています）

この際、改めて最高賞の授与が決まった写真を見つめ、いじめの酷（むご）さと祭りの意義について、真摯（しんし）に考えたい。

主催者側の定見や節操のなさにはあきれられるが、あえて責めまい。大事なのは、被写体の思いを受け止めることだ。

青森県黒石市の「黒石よされ実行委員会」が実施した写真コンテストで最高賞の市長賞に内定していた作品への授賞が、一度は撤回された。被写体の女生徒がいじめを苦しんで自殺したため、市や実行委は「祭りの写真としてふさわしくない」と判断したためという。

遺族は「いじめられても笑顔だった姿をたくさんの人に見てほしい。二度といじめをしないでという娘の願いを伝えたい」と実名と

写真を公表し、市などの対応に批判が集中した。改めて会見した市と実行委は遺族に謝罪し、一転して市長賞の授賞を発表した。

女生徒は、青森市立中2年の葛西りまさん、13歳だった。公表された写真は、真っ赤な番傘をバックに踊る、りまさんの満面の笑みが印象的だ。8月15日に青森県の男性が夏祭り「黒石よされ」で撮影し、コンテストに応募した。

りまさんは8月25日に駅のホームから列車に飛び込んで亡くなった。遺書には、いじめを苦しめて「二度としないで」などと記されていた。

10日後に自ら命を絶つほどの苦悩や悲しみのなかにあつて、これほどの笑顔を見せられたのも、祭りという日常の現実から離れた場で、心を思いきり解き放つことができたからだろう。

ここに祭りの本来の意義、効用はある。そしてその笑顔を奪う酷さ、恐ろしさが、いじめの持つ本質だ。写真の笑顔が、その両方を物語る。

施行3年を経過した「いじめ防止対策推進法」は、いじめ根絶の切り札になり得ていない。りまさんへのいじめについても、学校や市教育委員会の調査に結論は出ていない。

いじめに苦しむ子供は身近にいないか。写真をきっかけに、見回してほしい。

また改めて、実名と写真が訴える力を知る。人には顔があり、名前がある。感情があり、歴史がある。社会はこのことを、もっと真剣に考慮すべきではないか。

安易な匿名主義は、大事なものを見失うことにつながる。

障害者の意思疎通で都内初の条例制定 千代田区 東京新聞 2016年10月20日

千代田区議会は十九日、手話や要約筆記、点字、音訳など、障害者が自身の特性に応じたコミュニケーション手段を取れるよう配慮する「障害者の意思疎通に関する条例案」を全会一致で可決した。区によると、障害者のコミュニケーション手段に関する条例の制定

は都内の自治体で初めて。

条例は、障害者が日常生活や社会生活を営む上で、円滑な意思の疎通を図れるようにするのが目的。区の責務として、災害時を含めてそうした環境を整えるよう定め、区民にも同様の配慮を要望している。また、企業の本社が集まる区の特徴から、事業者には区外にある事業所を含めて合理的な配慮をするよう求めた。

区は今後、職員向けの研修や、区民、事業者向けの講習会を開く。（北爪三記）

全国・障害者雇用支援ポスター 上杉さん最高賞

琉球新報 2016年10月20日



上杉疾風さん

高齢・障害・求職者雇用支援機構が募集した2016年度障害者雇用支援月間ポスター原画の審査で、大平特別支援学校の中学部1年の上杉疾風（はやて）さん（13）の作品「ムシはかせ」が、絵画・中学校の部で全国1位にあたる厚生労働大臣賞を受賞した。作品は上杉さんがカブトムシやクワガタ、セミを見詰める姿が丁寧に描かれている。上杉さんは「受賞できてうれしい。もっと昆虫の絵を描きたい」と笑顔を見せた。

全国から絵画の部に1970点（小学校の部200点、中学校の部374点、高校・一般の部1396点）、写真の部に181点の応募があった。上杉疾風さんの作品「ムシはかせ」が使用されたポスター（高齢・障害・求職者雇用支援機構提供）

昆虫が好きだという上杉さん。絵を描くのも得意だといい、受賞した作品も「鏡を見て、かっこよく描きたいと思った。虫の色を塗るのが難しかった」と話した。

19日には同校で報告会があり、受賞を記念した横断幕や手製のくす玉で祝い、集まった生徒たちが大きな拍手で快挙をたたえた。母のいずみさんは「周りの方々のおかげで、とてもうれしい。自信と次へのステップアップになる」と喜んだ。



優秀勤労障害者7人らを表彰 岡上で「ワークフェア」 山陽新聞 2016年10月19日

障害者の雇用拡大を目指す2016年度「障害者ワークフェア・インおかやま」（県、高齢・障害・求職者雇用支援機構岡山支部主催）が19日、岡山市内で開かれ、優秀勤労障害者7人、障害者雇用優良事業所3社が表彰された。同機構理事長表彰の紹介、伝達もあった。

表彰されたのは次の皆さん。（敬称略）

【優秀勤労障害者】知事表彰 梶井美里（ヤマト運輸）浅野晴博（仁科百貨店）森安優也（にしむら）▽県産業労働部長表彰 二宮未果（サイ）竹井義信（ベネッセビジネスメイト）兼丸聡（井原精機総社第二工場）福本美奈子（特別養護老人ホームライラック久世）

【障害者雇用優良事業所】知事表彰 倉敷化工（倉敷市）▽県産業労働部長表彰 カバヤ食品（岡山市）▽NTNテクニカルサービス岡山事業所（備前市）

【高齢・障害・求職者雇用支援機構理事長表彰】理事長表彰 水菱プラスチック（倉敷市）▽努力賞 丸五（同）

「色気づきやがって」「おばさん」神戸市立中学の特別支援学級で担任が不適切発言

産経新聞 2016年10月20日

神戸市須磨区の市立中学校で、特別支援学級の担任を務めていた30代の女性教諭が、知的障害がある2～3年の女子生徒2人に「色気づきやがって」などと不適切な発言を繰り返していたことが20日、市教育委員会への取材で分かった。

市教委によると、教諭は4月に初めて特別支援学級の担任になった。生徒のしぐさなどを見て「色気づきやがって」「おばさんみたいやで」といった発言を1学期から繰り返した。生徒は「嫌だった」と保護者に訴え、2人のうち1人は7月から不登校になった。

同月、保護者から学校に抗議があり発覚。教諭は保護者に謝罪文を出した。学校側の聞き取りに対し「冗談のつもりで言ったが、子供たちの心を傷つける発言だった」と話したという。

学校側は9月の2学期から教諭を担任から外し、普通学級の担当とした。市教委は「研修をより充実させたい」とし、近く教諭から事情を聴いた上で処分を検討する。

職員数、定員満たず受け入れ停止処分 名古屋の障害者施設

中日新聞 2016年10月20日

名古屋市は19日、有限会社「WATER. PROOF. K」（中村区）が運営する障害者就労支援施設「わーくしょっぷ はんぶんこ」（同）を来月1日から来年1月末までの間、新規利用者の受け入れ停止とする行政処分を決めた。

市によると、この施設のサービス管理責任者と直接支援職員の計2人が、隣接する障害者介護事業所でもヘルパーを兼務しており、常勤の人員要件を満たしていなかった。さらにサービス管理責任者は、常勤ではない場合、市からの給付金が3割カットとなるが、2011年8月～15年8月に計1230万円を不正受給していた。市は加算金を含め、同社に計1720万円を返還するように命じた。

市の監査で不正が発覚し、同社は「ヘルパーの数が足りなかった」と市に説明した。市は、同社が返金の意向を示しているとして刑事告訴はしないという。

全国障害者スポーツ大会で健闘を



岡山勢、壮行式で決意 山陽新聞 2016年10月20日
結団壮行式で決意表明する塚崎智宏選手（左）と浜田裕之選手＝JR岡山駅東口広場

第16回全国障害者スポーツ大会（22日開幕・岩手県）に出場する岡山県と岡山市の両選手団の結団壮行式が20日、JR岡山駅東口広場であり、選手たちが大舞台での健闘を誓った。

陸上や車いすバスケットボールなど7競技の選手（県47人、市18人）と役員（県29人、市14人）のうち、ほぼ全員の107人が出席。宮地俊明副知事

や大森雅夫市長らから激励を受けた。水泳の浜田裕之、卓球の塚崎智宏両選手が「代表としての誇りを胸に練習の成果を遺憾なく発揮し力の限りプレーする」と力強く決意表明。全員で拳を突き上げ「ガンバロー」と氣勢を上げた。

昨年の和歌山大会で岡山勢は金23個を含む56個のメダルを獲得。今回は、陸上立ち幅跳びで切封（きりふ）佑太郎選手が4連覇を狙うほか、団体ではソフトボールが2年連続の頂点をうかがう。県選手団で初の女性旗手を務める陸上の熊原弓叶里（ゆかり）選手は「緊張すると思うが、頑張ってやり切りたい」と話した。

両選手団は式後、新幹線で岩手に向け出発した。

大会は24日まで、岩手県北上市の北上総合運動公園陸上競技場など15会場でオープン競技を含む17競技が実施される。

ボウリング 久保道雅（36）伊予市

愛媛新聞 2016年10月20日



右手を突き上げる独特のフォームからパワフルなボールを放つのは、ボウリング知的障害者青年男子に出場する久保道雅（36）＝伊予市。2014年長崎大会以来の出場に「長崎以上の得点を収めたい」と笑顔を見せる。

競技は6、7人が一組となり、4ゲームの合計点数で順位を競う。久保は長崎大会で計679点をマークし1位だったが「初めての大会で緊張し、思うように投げられなかった」と振り返る。

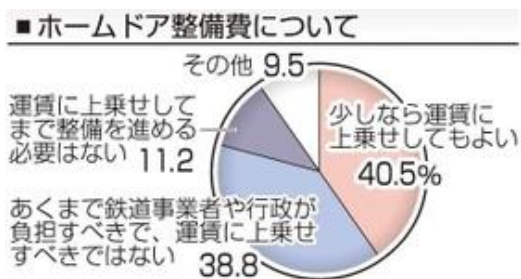
生まれつき知的障害がある久保。県立第三養護学校（現・県立みなら特別支援学校）で学び、高校時は陸上競技で知的障害者の全国大会に出場するなど運動を好んだ。卒業後に始めたボウリングでは、速いボールを投げる際に「鍛えた足腰が生きている」と話す。

曲がり具合などが異なる7種類のボールを使い分け、1日2時間ほどの練習を週に何度も重ねる。長崎大会後、周囲のアドバイスでフォームを変え、リリースポイントを下げたことでスピードが増した。1投ごとに変化するレーンのオイルコンディションも判断できるようになってきたという。

これまで2度のパーフェクトを達成し「あの感触は忘れられない」とスコアカードをお守りに持ち歩く久保。「スコアを伸ばし、愛媛大会にも出たい」と、岩手と来年に控える地元大会で、自身の納得できる投球を目指す。

駅ホームドア整備 「運賃に上乗せ」4割が理解

神戸新聞 2016年10月20日



駅ホームで利用者の転落を防ぐホームドアの設置が進まない中、普及の壁となっている整備費用について、神戸新聞社は読者アンケートを実施した。その結果、「費用の一部を、少しなら運賃に上乗せしてもよい」との回答が最も多く、4割を超えた。16日に視覚障害のある兵庫県宝塚市の男性が近鉄大阪線でホームから転落し、通過電車にはねられ死亡するなど、転落事故は鉄道各社で相次いでおり、ドアの必要性を強く

訴える意見が目立った。

本紙はホームドアの設置が進まない理由を追った連載「命の扉 問われる安全社会」を3日までの5回、朝刊社会面に掲載。これを受け、アンケートを3～14日、インターネットで実施し、116件の回答を得た。

運賃への上乗せに関する質問に対し、多かった回答順に、「少しなら上乗せしてもよい」40・5%▽「あくまで鉄道事業者や行政が負担すべきで、上乗せすべきではない」38・8%▽「上乗せしてまで整備を進める必要はない」11・2%▽「その他」9・5%であった。

自由記述では、ホームドアの設置を求める意見が大半を占めた。「障害者のためだけではない。健常者の大人も事故に遭わない保証はなく、人ごとではない」「安全社会の基盤が欠落している。国家的に取り組むべき」など。新設駅への設置義務化を求める人もいた。

家族を駅での車両接触事故で亡くした女性は「今も悲しみの奥底に沈んだまま。尊い命が奪われないよう、一日も早く全駅に設置を」と求めた。知的障害のある男児と駅を利用

する母親は「1秒も気を抜けない。ホームドアがあれば、もっと多くの親子が安心して外出できる」と記した。

一方、ホームへの駅員配置や障害者への声かけなど、ソフト面の充実を求める声も多かった。(藤村有希子)

東京コレクションに元ハンセン病患者 「隔離の歴史を多くの人に」



東京新聞 2016年10月20日
ランウエーを歩く榎ミヨさん(左) = 19日、東京都渋谷区の表参道ヒルズで

「忘れられない一日になった」。表参道ヒルズ(東京都渋谷区)で十九日に開かれたファッションショー「東京コレクション」でモデルを務めたハンセン病の元患者の榎ミヨさん(83)は、この日が自身の誕生日だったこともあり、涙を流して喜んだ。会場に集まった国内外のファッション関係者ら約六百人を前に、手を振って堂々と歩き、ポーズも決めた。(加藤健太)

榎さんは、十歳の時に発症し、住んでいた神奈川県から隔離された。後遺症で両手の指を伸ばすことができず、世間の目を気にしながら生きてきた。今も国立ハンセン病療養所「多磨全生園(ぜんしょうえん)」(東村山市)に入所する。

そんな榎さんが、武蔵野市の服飾デザイナー鶴田能史(たかふみ)さん(35)から出演依頼を受けた。大勢の人から注目されることに抵抗はあったが、昔からおしゃれは大好き。鶴田さんの「隔離されてきた過去を多くの人に広めたい」という思いにも賛同し、出演を引き受けた。

鶴田さんは、障害者をモデルに起用するなど誰もがおしゃれを楽しめる服作りをしてきた。昨年参加する東京コレクションでは「国際情勢を反映した作品」が自身のテーマ。ハンセン病を取り上げたのは「各国で今も差別が残っている」と考えたからだ。元患者を起用し、本人に合う一着を作ることにした。

鶴田さんは、デザインと機能性の双方を重視してドレスを仕立てた。ファスナーの引き手は指が伸ばせない榎さんでもつかみやすい輪っかのタイプを採用。「観衆の前に立てば手をとっさに隠したくなるかもしれない」とも思い、自然な高さにポケットを付けた。

背中には膨らみがもたせてあり、榎さんにぴったり。事前の衣装合わせでは、鶴田さんの優しさがちりばめられた一着をまとい、榎さんは「最高に幸せ」と笑顔を浮かべた。

車いすで鑑賞した千葉県大網白里市の自営業小嶋好宏さん(51)は「病気や差別に真正面から向き合う姿に感動した」と語った。鶴田さんは「榎さんは単なるモデルではなく回復者の一人として、矢面に立つ覚悟で歩いてくれた。きょうの一步一步が、差別を受けてきた歴史を知る一歩目になれば」と話した。

<ハンセン病> らい菌が主に皮膚や神経を侵す感染症。現代では治療法が確立している。感染力は極めて弱い、日本では「らい予防法」が廃止される1996年まで、国による療養所への強制隔離など、差別や人権侵害が続いた。2001年の熊本地裁判決は隔離の違憲性を認めた。

不審者から入所者守れ 五條市の養護ホームで訓練

読売新聞 2016年10月20日

相模原市の知的障害者福祉施設で今年7月に起きた殺傷事件を受け、五條市釜窪町の市立養護老人ホーム「花咲寮」(中井久代寮長、43人)で19日、不審者侵入を想定した防犯訓練が行われた。市内



の福祉施設の担当者や五條署員らが、不審者への対応や入所者避難などの手順を確認した。
刃物を持った不審者への対応訓練をする職員（五條市の花咲寮で）

訓練は不審な男が、突然刃物を持って暴れ出すとの想定。職員は、散歩から帰ってきた入所者を安全な場所へ避難させるとともに、110番した。刃物を置いて落ち着くよう説得したり、さすまたを使って入所者に近づかせないようにしたりして時間を稼ぐと、5分後、駆けつけた同署員が男の身柄を確保した。

相模原市の事件後、市は花咲寮に撃退用のさすまた2本を配備し、非常時の職員の役割分担を決めるなど、対応策を進めている。中井寮長は「入所者の安全を守るため、日頃から準備を怠らないようにしたい」と話していた。

自作の詩でカレンダー制作 重度身障者の大西さん 徳島新聞 2016年10月20日



自作の詩を収録した日めくりカレンダーを制作した大西さん＝阿南市那賀川町八幡の「がんばれる作業所」

障害者の地域共生を目指すグループ「おむすびの会」代表で重度身体障害者の大西多美子さん（54）＝小松島市中郷町豊ノ本＝が、自作の詩を収録した日めくりカレンダー「たーちゃんのいちにちひとこと」を制作した。生きる喜びや苦しみ、身近な人への感謝などをつづり、前向きな姿勢が読む人を勇気づける内容になっている。

カレンダーは縦20センチ、横18センチ。1カ月分めくれるよう1日から31日まで31枚あり、過去5年間に創作した31編を掲載している。大西さんの詩を、友人で書家の松下由美さん＝松茂町＝が書き、イラストレーターの石原杏奈さん＝阿南市桑野町＝が挿絵を描いている。「いじめられてつらいなら 学校なんかいなくていい…（中略）一つしかない君の命輝かそうよもったいないよ」は、いじめのため自殺した子どものニュースを知り、命の大切さとその可能性を訴えた作品。脳性まひの影響で全身に激痛が走った日には「夜中の痛みにつき合ってくれる 母に脱帽」と母住栄さん（78）に対する感謝をつづっている。

脳性まひがある大西さんは小学生時代から詩を書き続けていて、2013年に初の詩集「たーちゃんのひとりごと」を出版。読者からは「もっと読みたい」と反響があり、毎日目にするカレンダーにして楽しんでもらうことにした。

大西さんは「たくさんの人に共感してもらえたらうれしい」と話している。

22日午後7時から、徳島市の沖洲マリナターミナルで行うおむすびの会例会で、カレンダー完成記念パーティーを開く。1部980円（税込み）で500部制作。同市中田町の手作り雑貨店「夢こぼこ」などで取り扱っている。問い合わせは大西住栄さん＜電090（2789）8807＞。

幼児期に虐待、寝たきり…施設で暮らす子どもたち 山田佳奈

朝日新聞 2016年10月20日

■小さいのち 奪われる未来

真新しい紺色のジャケットと白いシャツ。15歳になった少年が西日本の特別支援学校の入学式にのぞんだ。ふだん生活する重度障害児施設の医師や看護師が見守るなか、校歌の演奏が流れた。だが、移動式ベッドに横たわる少年と一緒に歌うことはできない。

目は光に反応する程度で、寝たきり状態から回復する見込みはない。身長は140センチに伸び、にきびもできてきた。「かわいい赤ちゃんだったけれど、もう大きなお兄ちゃんだね」。入所当時から診てきた担当医は話す。

乳児期の虐待で重い障害を負った少年。1時間おきにたんの吸引が必要だが、背は伸び、にきびもできてきた＝高橋雄大撮影



元気に生まれたが、生後半年で心肺停止状態となり病院に運ばれた。その後、両足の骨折もみつかった。母親の当時の話では、父親による暴行があったというが、事件にはなっていない。両親は離婚し、母親とは連絡がとれない。父親はたまに面会に来るといふ。この施設で暮らす障害児25人のうち10人が過去に虐待を受けた。虐待で障害を負った子もいれば、もともと障害があつて虐待を受けた子もいる。「今日はどっちの服にする？」…

介護保険の自己負担限度額引き上げ検討…一般的な所得層、月7200円増

読売新聞 2016年10月20日

厚生労働省は、介護保険で利用者が支払う自己負担の限度額を引き上げる検討を始めた。現在は一般的な所得の世帯だと月3万7200円までしか負担しなくて済むが、来年度から7200円引き上げ4万4400円とする案を軸に調整する。19日開かれた社会保障審議会の部会に提案した。政府・与党は年末までに結論を出す予定だが、与党から今後、負担増に慎重論が出る可能性もある。介護保険は費用の1～2割を利用者が支払うが、自己負担が重くなり過ぎないように、所得に応じて4段階の限度額が設けられている。このうち住民税が課税されている一般的な所得層が見直しの対象となっている。この所得層で限度額（3万7200円）に達しているのは、3月時点で約22万人で、こうした人が負担増となる可能性がある。一方、増え続ける介護保険給付費の伸びを年100億円程度、抑制できる見通し。

神戸連続児童殺傷の「現場」 自然学ぶ場に整備へ

神戸新聞 2016年10月19日



児童2人の慰霊碑が立つタンク山の中腹。後方が通称の由来となった配水タンク＝神戸市須磨区友が丘

1997年に起きた神戸市須磨区の連続児童殺傷事件で現場の一つとなった通称「タンク山」について、隣接する兵庫県立北



須磨高校の教員らが20日、自然学習に活用できる場にするための取り組みを始める。まずは現況を調査し、草刈りなどの環境整備を進める計画。社会を揺るがせた事件現場だけに、専門家は「現場の負のイメージや、まちの死角をなくす試みとして評価できる」とする。(小西隆久)

所管する市建設局などによると、地元のニュータウンが開所した1967年ごろ、周辺緑地として整備。山の一部は配水池でタンクも設置され、山頂に事件現場となったケーブルテレビのアンテナ施設があつたが、現在は撤去されたという。事件前はタンクに続く坂道などで遊ぶ子どもらの姿があつたが、事件直後は報道関係者、やじ馬であふれた。亡くなった2人を悼む慰霊碑を地元仏教会が98年、タンクの前に建立。碑を守る北須磨団地自治会が毎年8月、追悼法要を営む。

今年の法要に出席した北須磨高の壺井宏泰教諭（50）が山の現状を案じ、再生活用を提案。市から現地調査の許可を得た。かつて同校から山頂への登山道もあつたが、現在は雑草などが生い茂って通れない。20日の調査結果次第で市に改めて使用を申請。山には多種多様なキノコなどが生え、地層には化石もあるといい、観察や発掘などができるようにしたい考えだ。小松原知子校長は「校歌の歌詞にもある大事な山。学びの場として活用できるように再生したい」。同自治会の西内勝太郎会長は「事件の記憶をとどめた上で、次

世代の教育に生かすのなら応援したい」と期待する。

小宮信夫・立正大教授（犯罪学）は、事件予防の観点から「学校主体の取り組み」を評価。「危険な場所を行政と一緒に検証し、防犯カメラなどの整備を同時に進めれば、さらに意義がある」と話す。

【神戸・連続児童殺傷事件】 神戸市須磨区で1997年2～5月、小学生5人が相次いで襲われ、小4の山下彩花さん＝当時(10)＝と小6の土師淳君＝同(11)＝が死亡した。兵庫県警は同年6月、「酒鬼薔薇聖斗（さかきばらせいと）」と名乗る当時中学3年の少年＝同(14)＝を逮捕。少年は2005年1月、関東医療少年院を本退院となり、社会復帰した。昨年6月、事件に関する手記「絶歌」を出版。一部の書店や図書館は販売や貸し出しを自粛した。

社説：新聞週間 「ぐるり」に関心持とう

京都新聞 2016年10月19日

キノコ博士として親しまれ、2003年に亡くなった吉見昭一さんはある日、京都御苑での観察会でこう漏らしたという。「最近の子どもたちは身の回りのことに興味を持たなくなった。自分のぐるりのことにもっと目を向けてほしい」。作家梨木香歩さんがエッセーで紹介している。

新聞週間（21日まで）が始まっている。今年の標語には津市の高校2年吉田楓（かえで）さんの「新聞を開くその手で ひらく未来」が選ばれた。夏の参院選から投票年齢が18歳に引き下げられた。若い人たちには、自分自身のことだけでなく、地域から世界まで、幅広い「ぐるりのこと」に関心を持ってほしい。

手前みそだが、それには新聞が最適のツールだ。新聞で知った演劇公演を見に行ったことが芝居の世界に飛び込むきっかけだったという俳優辰巳琢郎さんは「パラパラと眺めているうちに目に飛び込んでくる記事を読む。そういう道草が好き」と魅力を語る。

新聞の大きな役割は、ぐるりに潜む問題をえぐり出し、世に問うことだ。最近、富山県議会議員による政務活動費の不正請求が明らかになり、反響を呼んだ。選挙資金だけでなく遊興費や自宅のリフォームに使ったとは驚くほかない。一連の報道は富山の地元紙・北日本新聞が先駆け、全国のメディアが追随した。同紙の記者たちは情報公開制度で開示された膨大な領収書を丹念に裏付け、不正にたどり着いた。こうした地道な報道こそ新聞の真骨頂と言えよう。

気になるのは情報管理や取材制限の広がりだ。例えば、相模原市の障害者施設で19人が刺殺された事件（7月）や、岩手県の高齢者グループホームの入居者9人が亡くなった台風10号の豪雨災害（8月）では、警察や行政機関が被害者の名前を公表しなかった。

遺族感情やプライバシーへの配慮は理解できるが、事実を突き詰め、公権力を監視する報道の役割は重く認識されるべきだ。報道の自由は、民主主義が健全に機能するために必要不可欠だからである。18日に山形県内で開かれた新聞大会は「現場に密着した取材と多面的な報道により、民主主義の発展に貢献し、社会の公共財としての責任を果たす」と決議した。

同感である。京都新聞の秋の新紙面は「ぐるり360度 地元目線」がテーマ。京都と滋賀に根ざした言論・報道機関としての使命の重さを自覚し、節度と常識を持ち、毅然（きぜん）として日々の取材・報道活動にあたることを改めて誓う。

月刊情報誌「太陽の子」、隔月本人新聞「青空新聞」、社内誌「つなぐちゃんベクトル」、ネット情報「たまにブログ」も
大阪市天王寺区生玉前町5-33 社会福祉法人大阪手をつなぐ育成会 社会政策研究所発行

